

あろう。後者、七四頁の「東大寺の明恵高弁」、一二九頁の「蓮如に率いられた一向一揆」である。

むすび

以上、『中世仏教と鎌倉幕府』の叙述にしたがって内容の紹介と批判を行った。著者の、「体制・反体制・超体制」という中世仏教の三分的理解や武家的体制仏教のイデオロギーとしての「禅密主義」などの概念を提起する方法論的努力は、巨視的には、中世国家論のレベルで黒田氏が展開しようとした、中世の日本列島を一元的国家として理解する方向に対するアンティ・テーゼとして、東国政権である鎌倉幕府の独自性を強調するものであったことはいまでもあるまい。そしてそうであるならば、著者の方法論は、ポスト顕密体制論にむけてさらに練られて研究史上に位置づけられなければならないであろう。げに、方法論の模索は容易ではない。いまは、本書の視角が正當に中世思想史研究のなかで評価され、この問題についての論議がさらに深まるきっかけとなることを願うのみである。

最後に、なによりも本書の誤読を恐れつつ、失礼のほど、著者のご海容をお願いしたい。

(群馬県立女子大学助教授)

渡辺浩著

『東アジアの王権と思想』

(東京大学出版会・一九九七年)

中村 春作

本書は、丸山眞男日本思想史学の継承者である渡辺浩氏が、ここ数十年來に発表した諸論考の集成である。氏の立論の手法は、本としてまとめられるに当たって特に付された「序 いくつかの日本史用語について」に明瞭かつ印象的に示されており、そこに提示された問題意識と方法論とが、本書を決定的に特徴づけるものである。本書を論ずる上で重要な論点になると思われるので、ここでは先ず、その記述の方法を氏の言葉に確認していくことから始めたい。氏は冒頭、「本書では、日本語による日本史叙述において現在広く通用しているいくつかの用語を用いていない」が、それは「決して奇をてらったわけではない。通用の語が、歴史認識の深化を妨げると思うからである」として、「幕府」「朝廷」「天皇」「藩」といった、我々が江戸期の思想を論じるのに通常使い慣れてきた諸用語をあえて使用しないわけを説得的に述べる。

たとえば「幕府」という語の一般化は後期水戸学の使用に由

来しており、江戸時代末期における流行、普及の特別な政治的背景を考えれば、「幕府」とは、皇国史観の象徴にほかならず、その安易な使用は「江戸時代の中で、江戸と京都の関係が

大きく変化したという事実を見えにくくし」水戸学的な江戸・京都の関係解釈を特権化する。さらには、古代以来、天皇家が「武家」との関係においても「変転に変転を遂げ、そのことによってようやく生き延びてきたという事実を忘れがちにさせる」ことに他ならない、と氏はする。そして、それらの用語を用い

ずに江戸期の思想世界が語られるべきであり、「幕府」について言えば、「当時最も普通の呼称を使うのが自然」で、それは「公儀」という語であるとしている。同様に、「朝廷」という語の使用われ方も今日とは異なっており、江戸の「公儀」もしばしばその語で称されていたにもかかわらず、最初から両者を並立する二元的実体として「朝廷」といえば、当然京都にあり、江戸にあったのは「幕府」だったという通念が、実は水戸学的であり、「近代的」なのである」として、そうした思いこみから、江戸期の思想世界を解放しようと試みる。「天皇」「藩」といった用語についても同様に、後期水戸学的の「近代的」視野の限定からの解放が示される。そして、こうした手法と共にある思想的関心は、氏の表現を使えば、「もはや永遠に還ることのない過去の時間の中で、かつて本当に生きていた男女たち、そして、時には現代に生きる我々と同様の問題に直面して悩んでいた男女たち——その人々の、政治にかかわる理論・思索・考

え・思い・感情・気分等を理解し、了解し、そして、彼らとともに自分も考えてみたい」「(はしがき)」という知的な追体験の欲求であるとされている。

これら、従来の日本史用語の使用をめぐる我々の思いこみとそれに由来する錯誤からの解放は確かに新鮮であり、それが本書巻頭に置かれていることから、氏の志向するところは衝撃をもって読者に迫って来る。ところで、こうした手法及びその手法と直結した思想的関心のありようは、氏の旧著にすでに示されていたものであった。氏は、話題を呼んだ前著『近世日本社会と宋学』(一九八五年)に、皆川淇園「問学拳要」から「凡そ古人の書を読み、古人の言を誦せば、須らく略その世に通ずべし。蓋し当時天下の大勢は如何、民風は如何、その国安危の勢は如何、その国制・職官・位秩は、何を貴しと為し、何を賤しきと為すか、及びその人の世族、本何の宗に出で、その人の身分の高下及び平生の履歴は皆如何といふが如きの類、審に知らずんばあるべからざるなり」という箇所を引き、自らの思想史記述の方法を述べていた(「序」)。氏はそこで、「ある意味で全く常識的な」この手法に徹することで、「対象の理解を深め、その歴史的展開を説明する」ことを課題とし、徳川前期儒学思想史を「外来思想としての宋学をめぐる受容と反発・軋轢と変容のドラマ」として内在的に描き出そうとしたのである。そしてその結果、「徳川時代の儒学史」が「外来思想と既存の思想(それは往々社会の制度と結合している)」との一面での親和性を下地

に、他面での非親和性・不適合性を解消し解決すべく、次々と新たな試みのなされた過程」として捉えられ、「本来思想主体の内面構造に関しても、ある深い齟齬を日本社会との間できたしていた」朱子学との格闘を通じての「儒学の一つの巧みな日本化」「日本における思想の儒教化の進展」の諸相が、前著において語り出されたのであった。そのことと重ね合わせれば、今回の新著が、より純化された方法とそれに基づく叙述により、江戸中後期の思想世界が引き続いて論じられた、議論としては一連のものであることは明らかである。そしてそうした一貫した方法に依りつつ、今回は本書においてどのような思想史記述が可能になったのか、また丸山思想史学の何を継承しどこが異なるのか、さらには近年のポストモダンの、思想の言説性を問う研究潮流を一方に置きつつ為されるこの研究の意義といたことがらが、(氏はそうした動向に特に言及しないが)我々読者にとっては関心事となるであろう。そうした関心につながる、氏において鮮明に提示される、方法的自覚と思想史叙述の問題は、あらためて考えることとして、先ずは上述の手法によって統一された、本書の内容を概観しておきたい。

二

本書の編成を目次によって示せば、以下の通りである。

序 いくつかの日本史用語について

I 政治体制の思想

1 「御威光」と象徴——徳川政治体制の一側面——

2 制度・体制・政治思想

II 東アジアの諸社会と思想

3 儒学史の異同の一解釈——「朱子学」以降の中国と日本——

4 儒者・読書人・両班——儒学的「教養人」の存在形態——

5 東アジアにおける儒学関連事項対照表——十九世紀前半——

III 日本儒学と国学的心性

6 「泰平」と「皇国」

7 「理」の美的嫌悪と暴力

IV 西洋の「近代」と東アジア

8 西洋の「近代」と儒学

9 「進歩」と「中華」——日本の場合——

各論文の事細かな紹介は省き、ここでは、各編の問題設定に限って概要を得ておくにとどめる。

「I 政治体制の思想」は、戦国の世を経て文字通り「剃き出しの暴力」によって成立した徳川の支配の、その正当性の根拠の所在を、思想家の言説のなから何らかのイデオロギーとして求得的に抽出するのではなく、いわば徳川世界に充満し、その質を決定した空気のごときもの、緻密に制度化された「格式のゲーム」の集積それ自体の中に求めようとしたものである。

「二百七十余年の久しきに因襲せる嚴重なる慣例・格式・作法・礼儀等にて形而下を檢束し、遂に形而上に及ぼし」(福地桜痴)た事実、すなわち「身分格式を印象づける象徴的事物と儀礼・儀式・祭典等の種々の象徴的行為が、永い「泰平」の内に異常なまでに發達し、上位者を見えざる光背で包んで」おり、「都市・建築物・家具・従者・荷物・衣装等の全てが舞台装置・大道具・小道具となつて威信の系列を表象し、それを自他に公示し、相互に確認する儀式が至る所で念入りに執行されて」いて、「理屈より心に、知性より諸感覚と感性に訴える諸象徴が、不斷に機能し、体制維持の一助となつていた」ありようを、豊富な史料、特に大名、武士階級の社会的生活の記録そのものの中から浮かび上がらせたものであり、引用の適切さと併せて、氏の社会史的思想史記述が効果的に發揮された二論文から構成されている。

「Ⅱ 東アジアの諸世界と思想」は、いわば三点測量のようなかたちで、日本・朝鮮・中国の一八世紀から一九世紀にかけての思想的布置を、特にそれを担った当事者たちの社会内的ありかたを軸に対比的に論じ、結果として江戸期日本の思想状況の個性性を明らかにしようとしたもので、内容的には本書中、最も前著『近世日本社会と宋学』に直結する性格のものである。今回はそれを思想言説そのものの分析よりも、「思想成立の社会的な「場」に注目」し、その考察を同時期の朝鮮・中国に広げて比較対照のなかから論じた点に特色があり、全体的な見通

しの良さが感得される章となっている。評者としては、特に「儒者・読書人・両班」が、江戸期における「教養」の發生を自分なりに考えていく上で参考になった。また、「東アジアにおける儒学関連事項対照表」も、かつて雑誌発表時に啓発されるどころ大であつたが、今回あらためて通覧して、近年注目される文化構造としての儒教社会の分析上、有益な助けとなるものであることを納得させられた。

「Ⅲ 日本儒学と国学的心性」も、前著で一部述べられていた内容の詳細な展開であるが、一般に信じられているように幕末の対外的な危機的状況が「皇国」意識を生み出したのではなく、「泰平」であるが故に「皇国意識」が拡がり易くなるという事情があつた」ことの重要性を言う章である。それは、「皇国」的世界像を確定した賀茂真淵・本居宣長の国学の場合にとどまらず、「获生徂徠の儒学体系も、十八世紀中葉以降、正に「泰平」の故に崩れ、「皇国」的世界像を生み出していった」ことを論じ、それ故に徂徠学派が自壊作用を起こし、服部南郭らの「文人化」はその「自己暴露」であつたと結論づける。国学の問題構成を予め準備したものとして、徂徠学における「泰平」観と学派自壊への観点が新たに提示された点に、本章の独自性があるだろう。

「Ⅳ 西洋の「近代」と東アジア」で取り扱われる議題は、今日の論点とも連なる、儒教と民主化という問題である。氏は儒教と民主化をめぐる近年の議論を整理し、「西化」↑↓「非

西化」の縦軸、「儒学」民主」↑↓「儒学」民主」の横軸を座標軸とする四区分の内の三つにそれらを分類配当した上で、残る一区分に配せられるべき儒学の可能性を考える（三者のいずれもが余り注目していない見解がありうる。それは、「西化」としての「民主」化こそが、儒学の教えの実現にはかならない、という見解である）。氏は横井小楠、阪谷素らの場合を例に、「第四の仮説的見解」の可能性を「江戸時代後期から明治前半の日本、即ち儒学的教養が最も浸透した時期の日本の知識人の眼に、同時代の西洋は、儒学の最も基本的な価値である「仁」や「公」を実現したものと映ることが、実は往々あった」ことの分析的解説から探ろうとする。そして、「仁」や「公」が彼らなりの西洋理解の中に読み込まれていった経緯が明らかにされ、「明治維新とは」「王政復古」の革命であると同時に、「儒学的西洋化」の革命でも、多分、あったのである。しかも、そのことによつてその後、儒学的諸理念は西洋思想にいわば吸収されていき、相対的には速やかに独自の体系としての思想的生命を失いつつあった。即ち、少なくとも日本では、儒学は西洋に発した「近代」を導き入れる先導役を果たし、しかも、そうしていれば自殺した―そのような一面が多分あった―のではないかと氏は問いかける（「西洋の」「近代」と「儒学」）。さらに、日本におけるそうした儒学の「もう一つの」展開は、「進歩」概念の血肉化の過程において、「西洋」を「中華」と捉える意識の中で起こり得たこと、そうした意味で（概念としての「中華化」＝「文明化」を、

自前に血肉化したことにおいて、「明治維新とは、西洋化の始まりであると同時に、江戸時代以来の中国化の完成であったのかもしれない」と氏は問題提起する（「進歩」と「中華」）。

以上が、評者なりに理解した全編の基本的な問題構成だが、もちろん、最初に触れたような手法によってなされる各論考の神髄は、史料発掘とその立論上の配置如何にもあるので、こうしたおまかな論点の整理だけでは、本書の優れた部分を充分伝えきれない憾みが残る。本書における文献引用の巧みさは、丸山思想史に通ずるもので、同じ文献を読みながら、評者などが何気なく読み飛ばしていたような、「語り口」への着目から思想の質を見出していく手法には、読みつつしばしば敬服したこと、またここに一々挙げる紙幅の余裕はないが、各論考から新知見や新展望を多く得たことを付言しておきたい。

その上で、以下、本書が日本思想史研究において持つ意義と、そうした方法的視野からの本書への感想を述べてみたい。現在困難な状況に直面していると思われる「思想史」研究の可能性や、「江戸」はいかにして語り得るのか」という、評者などが現在抱え込んでいる悩みにも直接つながる問題を本書は、提起していると思われるからである。

三

最初に紹介したように、本書において渡辺氏は、いわば「近代の文法」ならぬ「江戸の文法」を発掘し、その中に入り込む

ことによって江戸期の思想史を内部から再構成しようとしている。ただ、その内からの再構成が、論者の側から一定のストーリーが読み込まれるかたちではなく、言説そのものを生成する「場」の機制を多面的に認定していくかたちで為されているところに、本書の積極的に評価すべき特色があると言えるだろう。この特色が丸山日本思想史と異なるところである。そして、そうした手法が分析上最も効果的に発揮されていると思われるのは、Iの「御威光」と象徴」を主とした編である。そこでは、思想言説の分析では捉えきれない江戸期の支配システムの思想的把握が、江戸の社会空間を内部から支配した無数の視線の解読と共に見事になされている。本書に一貫する氏の立場は、そうした、思想・言説を生成させる「場」への注目であるが、一方、そうした手法であるが故に発生する問題もあるように思われる。

それは即ち、「場」を歴史的に固定させてしまう可能性、「語られた」思想に対して、「場」の決定性により依存して説明することの問題である。端的には、「Ⅱ 東アジアの諸社会と思想」所収の諸篇に特に感じることなのだが、日・朝・中を俯瞰する見通しの良さと共に、こうした構図においては、思想の理解が結局、「思想の担い手とその存在形態」の歴史的環境にはほとんど還元されてしまうのではないだろうか、という疑問である。「思想」と「思想の担い手、その社会内的存在形態」との密接な関連、相互規定は言うまでもないが、それが「場」の固定化、

通時的な「場」の「固有性」の確認に収斂してしまいかねないおそれには、留意する必要があるだろう。たとえば「理」を支える社会システムと江戸期日本における特定の条件を論じた箇所、当時の「家職国家」的環境に即して「理」も受容され得たことを言い、中沢道二の発言を引いて「原則的に生れによって割りつけられた（その意味で各人の「天命」たる）断片的な様々な形の「理」、それがピラミッドの図柄のジグソーパズルのように組み合わさって、万人あるいは日本人の共存を成立せしめる」と氏に結論づけられるような、場合によっては「日本文化論」に近似しかねない部分などに、そうした問題を感じた。そしてそうした、手法の斬新さと同居する通時的一般化（「日本的」「日本人の」と共に、系統発生的な思想史観への若干の違和感は、各論ごと末尾に付される氏の思想的意味づけの短文において感じられた。たとえば、「こうした徳川儒学の多様化は、「国学」と「蘭学」を含む儒学以外の様々な思想潮流をも導きだし、「学問」自体の一層の多様化と相互影響の状況を出現させていった。その渦中において、次第に、一方で天皇を政治的統合の中心として仰ぎ、他方で西洋に必要な限りで学ぶという精神態度も、ほかならぬ儒学的言辞の裏付けを得つつ、形成されていったのである」（儒者・読書人・両班）とするような総括がそうであるが、各節毎に思想の系統的展開の道筋が示される際、その説明自体は理解し得るものであれ、こうした、「近代」を準備するが如くに秩序的に理解される「江戸」とは、

冒頭で著者が明らかにした、「近代」の視線を外した「江戸の文法」の徹底という手法と、どう連動しているのだろうかという関心を抱いたのである。そのことをより強く感じたのは、「IV 西洋の「近代」と東アジア」の二論文においてである。氏に丸山眞男とは異なる「近代」への視座があることは明らかだが、たとえば「進歩」と「中華」論文末尾で示されるようなベシミスチックな感慨に示されるのが、氏のどのような「近代」観であるのか、そこをもう少し語って欲しい思いが残る。本書が「江戸」と「近代」の重複する場面を主題とし、それを戦後歴史学の固定的な視点を外して、いわば「厚い記述」のなかから語らせることを目指すものとして高く評価されるべきものであるだけに、「儒学は近代を導き入れる先導役を果たし、そして自殺した」といった、自然と脱皮するような「近代」成立論、思想史記述にやや飽き足らぬ思いも、欲を言えば残るのである。近年の「国民国家」論や、「近代の文法」といった発想が、我々の「この近代」を規定した知的編制そのものを対象視し、同時にそうした近代の知的編制において「再構成」された江戸期の思想を、あらためて問い直すものとしてあるとすれば、一方における、氏の「水戸学的」近代的「視野を排した「江戸の文法」への沈潜が、どのような「近代」観や、「江戸」の対象化と連動して成立するものであるのか、私にとっては興味のあるところだからである。

最近の「国民国家」論や、近代における「断絶・成立」を論

じる議論が、次の展開にむけての踊り場にあるように感じられる現在、氏のするような議論との相互批判的な接点を探ることから、これからの「日本思想史」学の可能性が、そして「江戸」はいかに語り得るか」が論じ合われるべきではないだろうか。各篇で示される新見解もさることながら、本書は、そうした方法的自覚、思想史記述の問題を、読者に直に問いかけるものとして、評者にとって刺激的で啓発に満ちたものであった。

（広島大学助教授）

大野出著

『日本の近世と老荘思想』

（ぺりかん社・一九九七年）

宮川 康子

道教的の世界観、および道家思想が深く民俗レベルに根ざし、なおかつ長い歴史を経て、仏教、儒教などと習合練磨されてきた中国とはちがって、道教的地盤をもたない日本において、『老子』というテキストが、いかに読まれ、その思想がどのように受容されてきたのかということは、きわめて興味深い問題である。特に近世江戸思想史において『老子』あるいは老荘思